

審査の結果の要旨

氏名 井上洋士

本研究は、本邦大都市部にある4つの医療機関に2002年11月～2003年4月の期間に通院したHIV感染者のうち、性的接触が感染理由でありかつ過去1年間に1回以上性交渉をしたことがある男性を対象に無記名自記式質問紙による配票調査を行い、126人の結果を分析している。研究目的は、safer sexのうち「膣・肛門性交時もしくはオーラル性交時にコンドームを使用すること」に焦点をあて、HIV感染者が性交渉時にコンドームをどの程度使用しているのか、その意図と行動の実態を明らかにし、またそれらに関連する要因として何があるのかを検討することによって、支援や介入のポイントをどこに置くべきかについての示唆を得ること、さらには一般に他者への健康被害を予防する健康配慮行動について理解を深めることであり、下記の結果を得ている。

1. 性交渉時のコンドーム使用意図と行動

コンドーム使用意図では、膣・肛門性交時に「使おうといつも思っていた」人は58.4%、オーラル性交時では16.7%。コンドーム使用行動では、膣・肛門性交時に「必ず使っていた」人は48.2%、オーラル性交時では14.0%。

2. 膣・肛門性交時のコンドーム使用意図と行動の関連要因についての検討

1)コンドーム使用意図を従属変数とした偏相関分析と重回帰分析

偏相関分析で有意性が確認された変数は「自分のSTI感染予防への積極性」、「相手へのHIV感染予防への積極性」、「HIV/STIの感染し易さに関する認識（膣・肛門性交時）」、「コンドーム使用のバリアに関する認識」であった。

階層的重回帰分析の結果、「HIV/STIの感染し易さに関する認識（膣・肛門性交時）」はコンドーム使用意図と有意な関連性が強く認められ、また「自分のSTI感染予防への積極性が高まる」→「相手へのHIV感染予防への積極性が高まる」→「コンドーム使用意図が高まる」という関係性の存在が推察された。

2)コンドーム使用行動を従属変数とした偏相関分析と重回帰分析

偏相関分析で有意性が確認された変数は「相手への HIV 感染予防への積極性」、「コンドーム使用のバリアに関する認識」、「性交渉相手のカジュアル性」であった。

重回帰分析結果からコンドーム使用行動はコンドーム使用意図と極めて強い関連性が認められた。「相手への HIV 感染予防への積極性」、「コンドーム使用のバリアに関する認識」、「性交渉相手のカジュアル性」も、コンドーム使用行動を下げる傾向にあった。

### 3. オーラル性交時のコンドーム使用意図と行動の関連要因についての検討

#### 1)コンドーム使用意図を従属変数とした偏相関分析と重回帰分析

偏相関分析で有意性が確認された変数は「HIV/STI の感染し易さに関する認識（オーラル性交時）」、「性交渉相手のカジュアル性」で、これらはいずれも、重回帰分析で同時投入しても、関連が認められた。

#### 2)コンドーム使用行動を従属変数とした偏相関分析と重回帰分析

偏相関分析で有意性が確認された変数は「コンドーム使用のバリアに関する認識」、「性交渉相手のカジュアル性」であった。

重回帰分析結果から、オーラル性交時のコンドーム使用行動はコンドーム使用意図と極めて強い関連性が認められた。また、「性交渉相手のカジュアル性」が高まるとコンドーム使用行動が低くなるという有意な関連が認められた。

### 4. コンドーム使用意図と行動の関連要因についてのパス解析

1. から 3. までの分析結果を踏まえて修正した修正モデルと当初の仮説モデルとを比較し、修正モデルの適合度がより高まったかどうかの検討を構造方程式モデルにより行った結果、膣・肛門性交時のコンドーム使用意図と行動の関連要因、オーラル性交時のコンドーム使用意図と行動の関連要因、いずれにおいても、修正モデルが採択できた。すなわち修正モデルは各指標ともに仮説モデルよりも良好な値を示していた。

以上、本論文は、これまで調べられて来なかった日本の HIV 感染者の性交渉時コンドーム使用意図と行動について、その実態ならびに関連ならびに関連要因を初めて明らかにしたものであり、今後の HIV 感染者のコンドーム使用行動を高める支援戦略を立てる上で重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。